

総評 2025年4月分 杉本真維子

「歩いてきた距離も見えない猛吹雪／いつか謝りたいことがある」辻村陽翔（北海道）
猛吹雪という「今」の只中がまずは尊い。その先の謝罪までの距離が主体を生きるほうへとひっぱっているようだ。

「お祭りの屋台を解体するように／眠った むらさきいろの手招き」小池耕（東京都）
まずは終わることのさみしさがあり、「眠った」から「むらさき」までの深い間（ま）に夢が発生している。死と再生を中継するものは夢だと感じられることに対して陶然となる。

「風邪をひき文鎮すこし重くなる」桜庭 紀子（和歌山県）
この主体は「わたし」というにんげんなのだろうけど、ひょっとしたら「文鎮」かもしれないとほんのかすかに思わせる。そのかすかな余地がにんげんをつくっているのかもしれない。

「猫は歩く／ふむすふむす／知らないくせに／ふむすふむす」入山 夜鶴（宮城県）
肉球のやわらかさまで包み込んだ「ふむす」という不思議なオノマトペがとてもよい。

「枯れてしましましたねスミレ／レントゲンみたいに私を見てたね／スミレ」波野 梅雨（東京都）
花が枯れるとはこんなにも悲しいことだったのだと改めて思い知らされる。「レントゲンみたいに」深く見るものと見られるものとのあいだにある絆が、それをなぐさめている。

「屋根を叩かれ軋み音が響く。／指耳栓で布団に潜る。／一人の夜に家は喋り出す。」榕夏（北海道）
雨音に声が聞き取られている。迷惑なほど喋りだす家。根源的な恐怖のようなものが生のこころもとなさをそっと暴いている。

「レジ袋を前世として白鷺の気高さ」波津 ゆみ（神奈川県）
この作品の優れている点はレジ袋に気高さを与えているところだろう。

「そっと死ぬはっきりと死ぬ虹の君」池田 彩乃（青森県）
死を経験できない限り、それはいつも他者のものであるだろう。死をめぐるそんな視覚的な困難さについて考えさせられる。

「ベランダの花に／彼氏ができたかもしれない／洗濯物と昼の月が青白い」白鳥 陽太（神奈川県）
まだ知らない世界がこんなにもある、と知ることは幸福だと思う。

「今さら淋しくて桜に甘えに行く」広瀬 心二郎（埼玉県）
この「桜」が比喩でないところに興味をそそられる。

「立ちなさい四月の森の手のひらを／牝鹿の脚は硝子ではない」 山野ゆかり（東京都）
にんげんの脆さと逞しさの表出。最終的な救いの声はおのれのなかから立ち上がるのだろう。

「最後まで／お互い被害者の顔をして／チョコレートパフェ静かにくずす」 箭田儀一（広島県）

この届託のないお互いの顔の尊さ。ここに「被害者の顔」を重ねるたくみさ。被害者がうしなわれるものを的確に言いあてている。

来月も楽しみにお待ちしています。